



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	元旦の北大キャンパス
Author(s)	眞崎, 睦子; MASAKI, Mutsuko
Description	北大施設探訪
Citation	リテラポプリ, 29, 15-15
Issue Date	2007-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/42597
Type	article
File Information	masaki_LP29-15.pdf



元旦の北大キャンパス

言語文化部 眞崎 睦子



二〇〇七年一月一日午前十時頃、思い立って北大を訪ねた。正門横の門衛所では灰色のカーディガンを羽織った方が、今年最初のお茶の時間。車両入構禁止の文字。車両チェックのボックスの中にはいつものコート姿の方のかわりに竹ぼうきと熊手が立っている。中央ローンのサクシユコト二川の流れはいつもと変わらない。えつ。カラスが三十羽ほど集団で行水をしている。羽を広げたり、顔を何度も水につけては出し、つけては出し、カラスなのに、長々と。

中央道路にぶつかったところで北へと向かう。あつ。雪が、青い。いつもは人影を映している白い雪が青みがかって見える。低温研のみなさん、雪って空の色を映すのですか。そういえば水も青く見えるな。

西にも行ってみようか。すれ違った家族連れは何がうれしいのか、大はしゃぎ。台湾から来られたようだ。右手には上着一枚の新渡戸先生がいちつしゃる。手袋をはずして、不躰にも右上腕部を叩いてみたところ、カンと冷たい音が返ってきた。新渡戸先生に背を向けると、電話ボックスよりちよつと大きいくらいの「バイオのトイレ」なるものが視



界に入ってきた。微生物が活躍するという説明を読んだ後、ドアのノブに手を掛けてみた。開いている。……私。私は実証主義の立場を貫いた。が、手を洗う水道がない。生まれて初めて雪で手を洗った。これも小さな利雪。

さて中央道路へ戻り、さらに北へ。左手に大野池が見えてくる。凍っている。んつ。何ものが池を渡った形跡が。三つの足跡を発見した。カラス、そして犬かキタキツネ、もう一つは人間、とても小さな長靴だ。ここで第四の足跡をつけたくなるというのが人情だ。もちろん、危険がともなうことは承知している。体を大きく左に傾けて右足だけ。少しずつ体重をかけていく。あああ、ブーツが。事なきを得てよしとする。四つの足跡にダーウィン気分。

さらに北へ。工学部の前で三台の除雪車が休んでいた。図書館北分館の前には珍しく足跡がない。高等教育機能開発総合セン



ター(それにしても長い名前だ)の玄関横、守衛室には今日も明かりが灯されている。北十八条通りを渡ってモデルパーンへ。建物はみな施設してある。が、ここでもお手洗いは開いていた。開けるだけ、開けてみる。暖房まで入っていて親切だ。ひょうたん池もやはり凍っていたが、カラスの足跡をみるだけに留めて、帰ることにした。

来た道へと振り返り、歩いていくと南から走ってくる人がいる。あつ。去年、授業に出ていた陸上部のY沢さん(男性)。思わず、帽子のつばに手をかけた。Y沢さんも気づいて目礼。しかしお互いに立ち止まることはしなかった。白いジャージの上下は見る見る小さくなって雪の中に消えた。

今年もよろしくお願いします。サクシユコト二川ではまだカラスが行水をしていた。いや、交代したのかもしれない。

(まさき むつこ)